

第4章 環境教育の推進



水展 中項目パネル

高緯度地方や高地では、冬に降った雪が夏に融け切らないで貯まった積雪が氷に変わります。雪や氷河や万年雪の量は 2406 万 4100 k m³、地球全体の水の量の 1.736%を占めると計算されています。淡水の量は地球上の水の約 2.5%しかありませんが、そのうちの約 7 割が凍っています。南極氷床に降った雪が氷河となり、冰山として流出するのに 10 万年を超える時間がかかります。

4-1 環境教育としての水展

1. はじめに

本事業は、博学連携のあり方を研究すると同時に、環境教育の推進を目的とした。ここでは環境教育の視点から本事業をふりかえる。

2. 環境教育とは

「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」が2003年に制定され、政府の取り組みを示した「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」(2004)のなかに、環境教育の目指す人間像として『環境教育については、知識の取得や理解にとどまらず、自ら行動できる人材をはぐくむことが大切です。環境教育を通じて、人間と環境との関わりについての正しい認識に立ち、自らの責任ある行動をもって、持続可能な社会づくりに主体的に参画できる人材を育成することを目指します。』とある。

環境教育は持続可能な社会を目指して、例えば開発、貧困、平和(戦争)、人権、人口、食糧・資源エネルギーなど、地球的な課題と複雑に関連しあっている環境問題を、解決あるいは未然に防ぐために主体的に行動できる人間の育成を目的としているといえる。そして、そのような人間として、自然にたいする豊かな感性を持ち、次のような技能・態度を有する人と考えている。

さまざまな事象を批判的にとらえ、主体的に考える。そして、自分の考えを相手にきちんと伝え、相手の話をきちんと聞き、互いの違いがわかるコミュニケーション能力を持っている。違いがわかった上で、他者を理解し

受け止めることができる。そのためには、自己肯定感が基本になる。問題を発見でき、その根本原因を把握し、複雑な問題をよりよく解決する力を持つ。持続可能な社会を構築するために、多様な価値観を尊重しつつ、協力・協働することができる。

本事業においては、様々な主体、学校(子ども)、市民、専門家、博物館の連携により、水を切り口に、子どもたちの自然や命への気づきを促し、体験を通して考える(発見する)ことができる環境教育を目指した。

3. 総合的・連関的にとらえる

環境教育においては、総合的・連関的にものを考えることが重要である。水を教材にすれば、水は全てのものをつないでいるともいえ、総合的・連関的な考え方や、つぎのような感性をはぐくむきっかけになるのではないかと考えた。

・身近な自然に気づく(自然って、おもしろいな)〔感性〕

・命(自分の生)の大事さ(今、ここに生まれて生きているということの不思議) = 人(自分)の自然性〔感性〕

水を守るための基本概念(表1)のうち、室内で開催する展示会という制約のために、水展では1から6の概念の紹介にとどまった。

4. 体験を通して学ぶ

環境教育を考えるにあたり、環境についての事実や概念を教える教育「環境についての(about)」,自然のなかでの体験学習「環境の中での(in)」,環境問題を解決するための教

表1 水を守るための基本概念

1. 液体の水が生命の源
生物にとって、水の質も量も重要です。
2. 水は不思議な物質
水は地球上では固体・液体・気体に変化します。水はさまざまな物質を溶かすことができます。水の性質が地球環境を特徴づけ、生物の生存を可能にしています。
3. すべての水は水循環の一環
生物・無生物の多様ななかかわりのなかで、水は循環しています。
4. 水は有限
水は有限な資源です。とくに、人が利用できる淡水資源は限られています。しかし、水は循環しているために、適切に使用すれば、持続的に利用することができます。
5. 流域
流域は地形、地質、気候、植生により特徴づけられ、地域によって水環境は異なります。また本来の流域に人為的な改変が加えられることもあります。
6. 人は大量の水を利用する
飲み水など生活に使うほか、食料生産、物の製造、発電等に多くの水を使います。人は水資源利用のために、他の生物に必要な水や水環境を奪うこともあります。
7. 汚染物質は水系内を移動する
水は汚染物質を発生場所から遠く離れたところまで移動させます。
8. 社会の安定にとって水が重要
生命を維持する水・生産活動のための水等、必要な水資源を持続的に利用できることが重要です。
9. 水の価値と利用方法は地域により異なる
水環境を守る方法はそれぞれの地域の中で検討しなければなりません。人を含む全ての生物の持続可能な水利用のために、市民として責任ある行動をとらなければなりません。

育「環境のための (for)」で区分する¹⁾とわかりやすい。環境教育が持続可能な社会の構築を目指すものであるなら、環境のための環境教育を強く志向することが必要である。批判的に考える力²⁾や行動力を養うための学びが重要であり、その第一歩として、自分で体

験して考えることが必要であると思う。

そのために、水展では体験型展示を中心にした。体験をとおして、不思議さに気づき、自ら学ぼうとする意欲を育みたいと考えた。

5. 子どもの参加

本事業は、子どもと交流し、水についての疑問を聴き、評価に参加してもらったものである。しかし、事業の企画や制作にも参加すれば、さらに子どもたちの主体的な学びを育むことができたと思われる。博学連携においても、参加のあり方が課題である。

6. おわりに

「水はどうして大切？」と子どもに聞くと、「水がないと生物は生きられないから」とわかっている。では、「どうして水がないと、生物は生きられないの？」と質問を重ねると「？」。これに答えるためには、たとえば細胞中の水の機能や挙動、水の性質など、相当の科学的知識が必要であるが。「なぜ？」と不思議を追求する力をもって欲しい。

また、地球の水の量は約 14 億 km³とされているが、この数字がどのように求められ、信頼性はどの程度あるのか。まわりの情報について批判的・科学的な態度を身につけておきたい。

実は、環境教育の学びを実現したのはファミリーテーターを担った水展ボランティアの皆さんだった。そのふりかえりを後節 4-3 に紹介する。

(小川 かほる)

引用文献

1) 千葉県(1994) 環境学習ガイドブック

絶版、下記 HP にて全文が紹介されている

http://www.pref.chiba.jp/syozoku/e_kans_ei/gakushu/07gaido/index.html

2) ジョン・フィエン(2001) 環境のための教育 批判的カリキュラム理論と環境教育、(訳)石川聡子、石川寿敏、塩川哲雄、原子栄一郎、渡部智暁、p.213、東信堂

4-2 水展ボランティア

1. はじめに

体験型展示等から発見を促すファシリテーターの役割りを市民（水展ボランティア）に担ってもらった。博物館という場が、子どもと大人の交流を促す機能をもつことの大きな可能性がみえた。

ここでは、水展ボランティアについて報告する。

2. ボランティア制度

当館は、2004年度に「千葉県立中央博物館ボランティア活動受入れ要綱」をつくり、生涯学習における自己表現を円滑に行えるように、また博物館を支える重要な協力者として活動できるように、博物館ボランティアに関して必要な事項を定めた。

この要綱に基づき「千葉県立中央博物館水展ボランティア細則」を決め、水展ボランティアの活動を始めた。ボランティアの学びの場の提供が第一であるが、水展の体験型展示

表1 水展ボランティアの募集チラシ内容（一部）

自分が楽しめる人。教えるというよりも、子どもたちの学びを支援することが楽しいと思える人。サービス精神のある人を募集します。

来場者に参加を呼びかけ、体験をサポートします。体験型展示については、現在作成中です（水について楽しく学べる企画を募集しています。また、ものづくりが好きな方、お力を貸してください）。

2005年2月より開催する月1回程度の研修会に参加して、いっしょに学んでいただければと思います。

無報酬（交通費もありません）。

を活かすためには、多数のファシリテーターが必須であった。

高校生以上を対象に、水展ボランティアの募集チラシ（表1）を作成し、2004年10月から募集を開始した。

3. ボランティア研修

（1）説明会

2005年1月22日（土）

中央博物館ボランティア制度、水展および水展ボランティア活動を説明し、研修会日程と研修内容を参加者と相談した¹⁾。また、2月に実施するプレ展示の担当日を決め、終了後、常設展示室および制作途中評価中の水展示を見学した。

（2）プレ展示評価ワークショップ

2005年2月13日（日）

プレ展示の評価ボランティアを対象に、評価手法を検討した（3-7-1参照）。

（3）プレ展示実地研修

2005年2月19日（土）～2月24日（木）

水展交流ボランティアは体験型展示の活動支援を担当した。また評価ボランティアは来館者の行動観察を実施した。閉館後、毎日の反省会により問題点を出し合い、短い期間であったができる範囲で修正を行った。さらに、水展ボランティアによる検証ツアー（良い点と改善すべき点）を行い、その結果を評価ボランティアがとりまとめた²⁾。

（4）水展ボランティア研修

第1回研修会

3月6日（日）

グループに分かれ、体験型展示の具体的な

支援活動を考えた(ワークショップ)。水に関する参考資料を紹介。

第2回研修会

4月17日(日)

生物と水に関する資料(小川が用意)を勉強した。

第3回研修会

5月22日(日)

土・地下水関係の資料を勉強した。ボランティアがつくった解説シナリオを検討した。参加者それぞれが水についての学習をすすめ、参考になる本を紹介しあった。

第4回研修会

6月12日(日)

水展イベントとして開催した環境の日・県民の日記念自然誌シンポジウム「水・科学と感性の融合をめざして-」に参加した。

直前研修会

6月26日(日)~30日(木)4日間

企画者から企画展の解説を受けるほか、緊急時対応や来館者対応に関してロールプレイ実習を行った(4日間とも同一プログラム)。

以上の研修のほか、中央博ボランティア研修会に参加した。

4. 水展ボランティアの使命

発見を支援する

体験型展示やクイズを楽しみながら、「地球をめぐる水とその不思議な性質を発見する」ために活動を支援する。そして知る喜び・わかる喜びを実感できるようにする。

いっしょになって、水の不思議を楽しむ
知っていることを教えるのではない。

人とのかかわりを楽しむ

来場者とのかかわりを一期一会の機会と考え、「今」を創る。

5. 水展ボランティアの人々

水展ボランティアには、水展担当者が個人

的に声をかけ、またその個人的なつながりから、あるいはポスター・チラシ・インターネットを見て申し込んだ人、水展プレ展示をみて参加を決めた人がいる。特に、評価ボランティアはインターネットの「学芸員募集の掲示板」を見て参加した、博物館の仕事に関心のある若い人たちであった。

研修会に1回以上参加し、水展ボランティアとして登録した方は70人であった。52日間の水展に参加したのは53人のべ303人(図1)に達した。30日間参加してくれた人もいた。

環境教育や環境保全に取り組む市民グループに参加の呼びかけをしたところ、水展においては、「千葉の自然に親しむ会」の会員が7人、「ちば河川交流会」の会員が6人、「千葉県環境教育研究会」に所属する学校教員が5人、エコマインド養成講座³修了生5人、環境教育演習⁴⁾参加者、プロジェクトWETエデュケーターなど多彩な顔ぶれがそろった。また、大学・高等学校インターンシップとして、日本大学生物資源科学部の学生2人、千葉県立実籾高等学校の生徒3人、同一宮商業高等学校生徒2人の計7人に水展ボランティアを体験してもらった。

展示室においては、名札、腕章、エプロンをつけて一般来館者と区別した。



水展ボランティアの服装

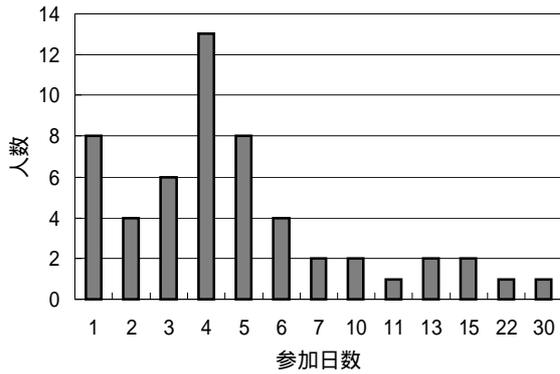


図1 水展ボランティアの参加日数

6. 水展ボランティアの手引き

水展ボランティアの手引きを作成した(表2)。このなかで、体験型展示のハウツーは、水展ボランティアが中心となって作成したものである。

表2 水展ボランティアの手引き(項目)

1. 水展の理念
2. 水展ボランティアの使命
3. 一日のスケジュール
4. 体験型展示について
(1) 各展示のねらい
(2) 各展示のハウツー
5. 危機管理
質問対応, 病人・怪我人対応, 防犯, 防災(地震・火事), 迷子, 忘れ物, 展示物の破損

7. 水展ボランティアの学び

水展ボランティアは、来場者、特に子どもたちの学びを支援する役割りを担った。この体験が水展ボランティア自身の喜びと学びにつながったようである。子どもたちの生き生きとした様子を見ることができてよかったこと、交流がとてもしかったと多くのボランティアが語っている。

また、ボランティア同士の交流が行われ、体験型展示の解説や支援方法などが共有されていった。次章に水展ボランティア自身のふりかえりを紹介する。

8. おわりに

制作途中評価や修正的評価、水展開催等にあって、水展ボランティアが大変大きな力となった。水展への高い評価には、水展ボランティアの寄与が大きかった。水展ボランティアは高校1年生から70代の方まで多様性に富み、関係性をつくる力のある人が多かった。若い人のリーダーシップとそれを見守る年配者の関係が絶妙であったと思う。

博物館活動支援のボランティアと博物館との関係について、博物館はボランティアの自主性を尊重すること、対等な関係のもと協働することの大切さを学ぶことができた。

(小川 かほる)

引用文献および注

1) トビリシ宣言の環境教育の原則の一つ「意思決定や決定結果を受け入れる機会を提供し、学習者が自分たちの学習体験の計画づくりに参加する Enable learner to have a role in planning their learning experience, as well as opportunities for making decisions and accepting the consequences of those decisions」のとおり、参加者自身が自分たちに必要な学びをデザインすることが重要と考えた。

2) 須藤友章(2005)「体験・評価ボランティアによる検証ツアー結果」小川かほる編『子どもとつくる博物館事業』による博学連携のための社会教育、特に環境教育推進事業中間報告書、千葉県立中央博物館, pp.65-71 (ウェブページにて公開予定)

3) 千葉県主催の環境学習指導者養成講座

4) 千葉県立中央博物館教育普及事業として、1999年度から2003年度まで開催。環境教育や環境問題について、共に学びあいながら主体的に課題を研究し、レポートにまとめ、発表する活動。

4-3 水展ボランティアという体験

瞳の輝き

青木 然

水展に参加して考えたことは、子どもの目はどんなときに輝くのかということでした。

雨粒やダイヤモンドダストの美しさにハッとしたとき。地下水迷路のなかで不思議な感触を味わいながら小さな冒険をしたとき。蛇口から水が出なくなったらどうする？ 私たちガイドの投げ掛けた問いに意表を突かれたとき。

子どもは「今」を全力で楽しもうと生きています。瞳の輝く瞬間は、楽しみを発見した瞬間。その瞬間から、新たな楽しみに徹底的に喰らいつこうとするのです。大人なんかより、うんと執着しているように見えました。

展示内容を伝えようとする私たちの意図通り、子どもが考えてくれるとは限りませんでした。でも、水展で体験した楽しみは、その後机の上で勉強することに実感を与えたり、日常生活で別の楽しみを発見するヒントになったりします。学ぶことの充実感は、こうして長い時間をかけて得ていくのだらうと思います。

水展ボランティアの役割は、見に来た人の目を輝かせること！水展ボランティアの喜びは、見に来た人と共に目を輝かせること！私はそんな風に感じました。博物館のボランティアに参加するのは初めてでしたが、この機会を与えてくださった小川先生に心から御礼を申し上げます。

水展ボランティアの思い出

植木 隆典

8月初めの午後3時過ぎのことでした。小学生の団体の水展見学も終わりホッとして展示室からボランティア控え室に戻るため、階段を下りていると、先ほど案内した赤や白の体操用の帽子を被った小学生の団体が上がって来るのに出会いました。先生が「片側に寄りなさい」と子どもたちに注意していました。「さようなら」と挨拶を交わしながらすれ違っていると、一人の男の子が私と同じ側を登って来るのが目に留まりました。先生の注意を無視してわざと反対側を登って来ようでした。ぶつかりそうになったので思わず腕を出すと、男の子は両手を上げて腕に抱きつくように飛び込んできました。私の腕をギュッと暫く掴みながら「さよなら」と言うと、サッと皆と同じ列に戻り帰って行きました。一瞬のでき事で何故男の子が、私の腕をあんなに強く握り締めたのか戸惑いました。しかし、さよならを言いながら腕を握り締めて「今日は楽しかったよ」と体全体を使って感謝の意を表現してくれたように感じ、嬉しく心地よい感触を私の腕の中に残していかれました。

私が見学時にその子に特別のことはしてあげたわけでもないので顔を覚えていたわけでもなく、私にとっては、大勢の元気の良い小学生の一人であったに過ぎません。従って、何故あの男の子が私の腕を強く握り締めたのか、今もってハッキリした事は分りません。もしかすると私の勝手な思い過ごしかもしれませんが、あの男の子は、単に帰り際に会ったボランティアのおじさんに気まぐれで甘

えて抱きついただけなのかもしれません。

しかし、なぜか、小学生が博物館に来て、水展を見て、触って、遊んで、そこに私達ボランティアが居て、楽しい時を過ごせた事が、あの男の子のすれ違い時の別れ際の行動になったような気がしてなりません。

水展勉強会やプレ展示のなかで数多くの事を学んだり、貴重な体験をしたり、多くの人との出会いがありましたが、私にとっては、この小学生との階段での一瞬の出会いと別れが、水展ボランティアの一番の思い出として心に残るような気がしています。

高校生の研修と水展ボランティア

植木 隆典

口は災いの元

水展ボランティアには、10代から70代までの市民が、さまざまな動機で参加していた。夏休みに入って間もないころ、博物館スタッフの朝の打ち合わせで女子1名男子2名の高校生が紹介された。職場体験のために2日前から博物館で研修を始めているとのことであった。博物館の一通りの説明、見学は終わりすでに業務体験を始めており、今日から水展の説明を私たちボランティアと一緒に行うので宜しくということであった。

定年退職者で怖いもの知らずのオジサンは、「今日はどの展示を担当したいですか。どんなことをしたいか希望を言って下さい。でも、それが叶うとは限りません」と考えるより先に口を動かしていた。この発言でその日一日高校生のお世話係を拝命することとなってしまった。

素直でやる気はあるが、大丈夫かな？

展示物の内容は、高校生だけに一通り理解しているようであった。問題は見に来てくれた方にどのように説明するかであった。女子高生は、将来博物館で働きたいという明確な目的意識があり意欲的に取り組んでいたが、男子2名はおとなしく素直ではあるが、今ひとつ元気が無い。将来どのような職業に就くにせよ、意思表示ができることは大きなことであり、大きな声で明るく話すことが課題のように思われた。他のボランティアの説明を見ながら、人や、水展の展示物、雰囲気慣れるにしたがって積極的になることを期待した。

先生もビックリ、高校生の成長

暗室に置かれた冷凍庫の中に人工的にダイヤモンドダストを作り、懐中電灯の光に照らされてキラキラ漂う氷滴を10数名の来館者の皆さんに見てもらおう展示は説明者にとっては知識と実験の要領、コミュニケーション能力が問われる展示説明の集大成のようなものであった。研修の高校生には、最終的にはこの説明が自信を持ってできるようになって欲しく思った。

彼らは高校2年生であったが、水展ボランティアには1年生の女子高生がいた。彼女は、最初は子どもが苦手と言っていたが、説明上手な大学生を見習って、日夜どうしたら小学生に楽しんでもらえる説明ができるかを考え、練習したとのことであった。その甲斐あってダイヤモンドダストの説明では、私たちオジサン、オバサンボランティアをはるかに超えるほど上手にできるようになっていた。こんな彼女の説明振りを目にした研修生も頑張り、わずか数日後であったが、心配で様子を見に来られた高校の先生が、学校とは違った一生懸命さでお客様に説明している高校生の姿を目にして、安心したというよりその変わり様に驚かれたようだった。研修終了後、そのうちの一人がボランティアとして水展に参加してくれた。彼ら高校生と一緒に活動できたことは、私にとっても水展での楽しい思い出の一つとなった。

私の水展ボランティア応募動機

小沼 詩恵

社会人学生として千葉大学工学部で学芸員資格取得のために博物館・美術館について学んでいることもあるが、もともと私は博物館や美術館が好きで、我が家の子どもたちが小さいときは毎月動物園や水族館に出かけていた。子どもたちが小学生になると、博物館や美術館にも出かけた。高校生になった現在は、親子でボランティアに参加し楽しい時間を博物館等で過ごしている。

近年、博物館・美術館等を訪ねると、ワークシートを張りきってやっているのは10歳ぐらいまでの子どもを連れた親子であり、ギャラリートークや講演会に来ているのは大学生以上である。私がとても残念に思うのは、中学・高校生の姿を博物館や美術館でほとんど見かけないことだ。大人になりかけた多感な時期の彼等にこそ、受験勉強ではなく学ぶ楽しさを味わってもらいたいと思っている。誰かに強制された学習ではなく、自分自身のために行う学びは、経験や知識を積み重ねることによって大きな喜びにつながっていく。

千葉県立中央博物館を訪ねたとき、職場体験に来た中学2年生の展示と解説があった。「水の色を調べよう」「さて何色にみえますか？それが水の色です」というもので、「ペットボトル何個で色が見えますか？」と、水道水の入ったペットボトルの列とそれと比較するための空のペットボトルが並んでいた。解説には、人間が色を感じるメカニズムと、水が太陽の光の一部をわずかに吸収すること、そして光の反射を受けて私たちの目が色を認識していることなどが書かれていた。

私はこの展示にとっても感動し、また、勉強させてもらった。これほど豊かな感性をもっている中学生を学校の中に閉じ込めるのはもったいないと痛感した。彼等の可能性を引き出すためにも、彼等を導く教師を対象にした博物館講座がたくさんあったら良いと思った。本当に学ぶ楽しさを知っている教師を増やすことが、日本の教育を希望あるものに変えていくと思う。

教師は知識を授けるのがうまい、学芸員は実物を利用して興味を抱かせるのが上手だ。学校の先生と学芸員が同じ学習テーマで教えたら、生徒たちの理解は学習と経験を通して一層深まるだろう。学校教育と博物館教育、この2つの教育機関が持っている長所を連携・融合させることにより、型にはまった一方的な教育ではなく、子どもたち自身が体験や感覚、感情などを通して、自ら持っているものを使って意味を解釈し構成していく学習へとつながっていく。そこで得たものが、その子の将来の勉強の意義付けになり、人生の目標になり、ひいてはこの国を守り豊かにしていくと私は考えている。

学ぶことは楽しみである。

私自身、博物館・美術館等を利用し、呼吸するのと同じように常に学び続けたいと思っている。そして、中学生や高校生が嬉嬉として集う博物館・美術館であってほしいと心から願っている。そのお手伝いができたら良いなと思い、平成17年度企画展「ワクワクたいけん2005 旅する地球の水」ボランティアに応募した。

そして、水展ボランティアの研修では、身近にある水について自分がほとんど知らないことを自覚した。このような状態でボランティアができるのかと不安を感じたが、研修会に出席し、また、自分でも勉強していくうちに、たくさんの驚きや再発見する喜びを味わった。さらに水展ボランティアとして私に何ができるのかを考えたとき、私を感じた驚きや喜びを伝えればよいのだ気づいた。教えるのではなく、展示を使ってお客様と一緒に楽しんでみよう、一緒に不思議がってみようと思った。

プレ展示を見て感動したことや研修会で学んだことを、家に帰り娘に話しているうちに彼女も水展ボランティアをやりたいと言い出した。高校生になったばかりの娘を、小川先生はじめ職員、ボランティアの方々は本当に温かく受け入れてくださり、親として感謝の思いでいっぱいである。水展に全力投球する彼女の成長はめざましく、日を追うごとに知識も増え、社会の一員として将来自

分がどう貢献していくのかを考え始めたようだった。

ボランティア活動は、自分のための活動である。ボランティアの喜びは、学習し知識が増えることではない。学んだことを人に伝えて「ありがとう」の一言を頂くことがボランティアの醍醐味である。

私にとって中央博のボランティア活動は、来館者の笑顔と「ありがとう」の言葉、そして一緒に活動している我が娘の成長が何よりのご褒美である。

私の最高の学びの場

小沼 恵

私は小さな時から母にいろんな経験をさせてもらってきた。例えば他の子がしていないような経験をしたり、博物館や美術館によく連れて行ってもらったり、だ。おかげで、今では友達の多くが「行きづらくて」行けないという博物館や美術館も大好きだ。そういう意味では、母には随分と総合的な学習を受けさせてもらった。特に中学校に入って、私は単なる「へえ！」や「面白い！」という段階から、やっと「自発的に」、「好んで」そういったものを求めるようになった。それがあって、私は水展ボランティアに参加する最初の「やってみたい」という気持ちに出会えたのだと思う。

中学三年生だった私を置いて、一足先に母が水展ボランティアを始めた。話を聞く度に、私の興味は膨らんだ。そして、母に誘われてプレ展へ行き、水展が今まで私が行って来た他のどの展示会よりも活き活きしている点に魅力を感じて、このボランティアに参加したいと強く思った。また、心の奥深くには、何かひとつのことに本気で夢中になったことのない自分、中途半端な自分を、このボランティアを通して変えられるかもしれない、変えたい！という希望もあった。そうした自分を高める一歩として、私は水展ボランティアに参加した。

しかし、水展ボランティアは私が考えていたよりももっと多くの物事をもたらしてくれた。15年の人生で最も本気で夢中になれたのは言うまでもない。それよりも大きな成果は、本当の「自分から学ぶ楽しさ」を知れたこと、将来を考えるきっかけになったこと、そしてたくさんの人々との出会いとそこから学んだこと、である。

今まで私は、勉強はそこそこやればできるし、つまらないものだ、と、甘く考えていた。しかし、自分で展示について調べてみたりして知れば知るほど疑問が湧き、知る喜び、自分が如何に物を知らないかを知った。そして、その感動をお客様と共有し、新たな発見をし、また共有する。これほど素晴らしいことはないと思った。また、これこそが博物館ボランティアを通しての学びの最も素晴らしいところであり、ボランティアは知識を教えるのではなく、教わっている側なのだと思う。だから、ボランティアが一番お客様に近いのだろう。

また、私はここで初めて、自分の将来について考えた。社会に自分が貢献できることはなんだろうか。自分は何をしたいのか。社会に貢献したいのなら、自分の思う理想の社会って何だろうか？ まだまだ未熟な自分のなかでは、未だに答えは出ていない。が、学び続けることだけは、決めた。本当に水展はいろいろなことを私に与えてくれたと思う。

私がボランティアとして活動しようと思って一番不安だったのは、私のような世間知らず、それも高校生が、大人の方たちの中で仲間としてやっていけるのかということだったが、職員やボランティアの方々はとても暖かく私を受け入れてくださり、仲間としてくれた。ここは私の居場所だ、とさえ思うことができた。私が水展にのめり込み、成長できた一番の理由は、たくさんの方が私の師となってくださり、支えてくださったからなのだ。そうでなければ、中途半端に終わってしまったに違いない。本当に感謝の気持ちで一杯である。すべての人にありがとうと言いたい。そして、この感謝を示すためにも、更なる成長のためにも、この経験を自分のこれからは活かし、成長したい。

私は、このボランティアを通して、数え切れないほど多くのことを学び、感じることができた。

学ぶことは、もう何があっても私にとってつまらないことなどではないし、まだまだ知りたいこともいっぱいある。それに、人と人のつながりの素晴らしさまで知れた。もっと成長して、自分を聡明な人間に近づけたい（これは私の一番の目標だ）。水展は最高の学びの場だった。

水展ボランティアに参加して

佐藤 正三郎

水展ボランティアに参加して、もう一年が経とうとしています。時間が経ちすぎて忘れてしまったことも多いですが、感想や学んだことをまとめておこうと思います。

過去の水展関係のプリントなどを引っ張り出してきて一番最初に感じたことは、展示前から展示、そして展示が変わっていく過程まで、一連の過程に関わられたことの素晴らしさです。まだ小川先生の頭のなかに構想があるだけの状態から、人や物が集まり、プレ展示が開かれ、改善、計画、展示準備...、この一連の過程に関わられたことは、博物館に興味を持つ私にとって、とても勉強になりました。教室で習うことと実際に参加するのでは学習効果が違います！

もう一つ学んだことは、水（特に地下水）についてです。水展の来館者の方が、展示を体験した後どれだけ地下水に興味を持ったかは、私に分かりません。でも、私が地下水に興味を持ったことは間違いないし、実際に地下水や水にいくらか詳しくなりました。少なくとも水展が、一人の「水に関心を持つ人間」を生んだのは、間違いありません。

そして自分にとっての最大の収穫物は、月並みですが人との関わりです。小川先生はじめ博物館の方、水展ボランティアの皆さん、来館者の方...、大学には経験できない、素敵な出会いです。（最後の打ち上げに参加できなかったことは今でも心残りです。）子どもに対する苦手意識が減ったのも、私自身の意外な成長でした。皆さん、本当にありがとうございました。またどこかでお会いしましょう！

水展ボランティアに参加して

城之内 健一

私は建設業を営んでおり、その中でも河川工事を主体としています。これからの工事は、環境に配慮することが求められており、さらに情報公開など、工事施工等の説明が必要となってきています。今回の水展ボランティアの経験を、市民に説明できる自己研鑽の場とし、さらにこれからの業務に生かしたいとの思いで参加させていただきました。

今回の展示物は触っても良い体験型展示が多く、まずは、自分で触れる物を見つけることにしました。触れない展示は、自分が知らない内容が多かったので、その展示の説明は遠慮してボランティアを行ってきました。しかし、自分の苦手な展示物は、他のボランティアの方の説明を聞いているうちに、段々と説明ができるようになったのも事実です、その逆に自信のあった展示物でも、ちょっとした質問を受け対応に困る場面もでてきて、自分のいたらなさを知ることができました。

中央博物館も有料となり、金銭（入館料）に見合うものを来館者が得られることが重要だと思って説明をしました。金銭に見合うものってなんでしょう？やはり、来館者が目を輝かせ、その笑顔が「もの」だと今回のボランティアで知ることができました。その笑顔を導き出すには、説明をする我々ボランティアの笑顔が必要です。

今回のボランティアで得たものは、大勢の来館者の笑顔と、ボランティアの方々の最終日の達成感のある笑顔でした。

自分の力になったもの

日本大学生物資源科学部森林資源科学科3年 菅野 瑠衣

大学3年。大学生活で経験してきた多くのことを形にし、自己発見の1つとして将来について具体化していく、そんな年なのではないか。実際、今年から就職活動セミナーが開始され、自分の就きたい職業について考えざるを得ない。

私は、今年初めは将来について明確なものが見えていなかったのだが、目標として就職活動に関する行事全てに参加することを決めた。そして6月、学科で職業体験を目的として毎年企画される「環境インターンシップ」の中の1つにあったものが、「水展ボランティア」であった。

その募集要項には、自分が楽しめる人・教えるというよりも子どもたちの学びを支援することが楽しいと思える人・サービス精神のある人を募集、と記載されており、個別塾でアルバイトをしている私は「子どもたちの学びを支援する」ことには、興味があり、自信があり関心を持った。

こうして、7月からイベント補助を中心に参加することになった。私が身についたことは大きく分けて2つある。

1つめは、接客・解説の仕方である。私は自分が客の立場だったときに、解説員の人がいるために展示をゆっくり見ることができなかった経験があり、今回は自分なりに詳しく丁寧であり、しつこすぎない接客を心がけようとした。しかし、全員に同じ対応ではうまくいかなかった。来館者は老若男女、性格もさまざまであるので、一人ひとりに適した接客方を瞬時に考え工夫することが身についた。また、親に連れられて来たよくわからないまま黙っていた小さな子どもが、自分の解説を通して展示に触れ、驚き、たくさんの感動したことを話してくれた。そんな子どもたちのいきいきとしていく様子に元気付けられた。募集要項の「自分が楽しめる人」ということが実現できたのである。

2つめは、水展ボランティアの方々、中央博物館の方々に、たくさん話を聞いたことである。ボランティアの方々には学生・学校教員の方・環境教育に携わる方、自然環境に関するサークルに参加されている方など、さまざまな立場の方が参加されていた。私は就職・卒業研究について行きづまっていたので、皆さんに相談することでアドバイスをいただくことができた。関連する資料をいただいたり、卒業研究をサポートして下さることにもつながったりした。また、私の研究に関連した内容の講座を見学させていただいたり、解説員の方による解説も身近な立場で聞けたりすることができた。これがきっかけとなり、解説員の仕事に興味を持つこととなり、現在解説員関連の職務を中心に就職活動を進めている。

博物館は、利用する側から見れば、博物館は展示を見に行っただけの学習の場である。学習の場とも思わずに遊びに行くという感覚のほうが当てはまるであろう。研究の場としての博物館も大事だということも共感できるが、娯楽としての博物館、娯楽と学習を結びつける場となってほしいと考える。学校教育と連携した子どもたちへの学習支援のことも考慮されているこの「水展ボランティア」は、ある意味新鮮であり、博物館を利用する側に学習への親しみやすさを与えてくれるものであった。

評価ボランティアへの参加動機と成果、今後の期待

須藤 友章

水展の目標は、子どもたちに水の色々な事象について興味を持ってもらうこと。この目標は小川学芸員や水展ボランティアの努力、そしてたくさんの方々の御協力によって非常に高いレベルで達

成されました。水展は効果的な展示事業を開催することができたのです。ところで、これは私の主観的な感想ではありません。来館者調査により収集したデータを分析した結果の一部、即ち客観的な評価結果なのです。そしてこの評価事業を担ったボランティアこそが、水展ボランティアのもう一つの顔、評価ボランティアでした。

水展は展示の完成度を高めるため、製作途中評価としてのプレ展示を数ヶ月前に開催しています。その際、展示メッセージは適確に伝わっているのか？という評価調査を実施する必要性から評価ボランティアが募集されました。私は大学院に在籍していますが、研究テーマの一角に「ジェンダーは博物館展示を通して如何に伝達されるのか」という問題を据えています。そこで、「環境教育とジェンダーはテーマが異なるけれど、展示伝達の検証という目的は同じであるから参考になるかもしれない。しかも博物館のボランティアとして取り組めるなんて絶好の機会！」という極めて楽観的な動機で、来館者調査とボランティアの実践を目的に評価ボランティアに参加させて頂きました。

では評価ボランティアは如何なる成果を残せたのでしょうか。まず評価ボランティア全体としては、水展の改善点を可視化し、更に包括的な評価を報告するという結果を収めました。この結果は、ボランティアによる評価は展示改善への有効性が高く、それ故に利用者にとっても非常に有意義な事業であるということを明確に示すものでした。ボランティアによる展示評価のプロセスを明らかにしたことに加えて、この認識に至ったことが成果ではないでしょうか。また個人的には、一連の評価事業に携わった結果、来館者調査や評価といったものの理念や方法、プロセス等を実践的に学び取ることができました。博物館での研究を志向している私にとっては、今後の指針ともなる貴重な経験です。ボランティアによる評価事業は博物館や利用者、そしてボランティア自身にそれぞれ特別な成果をもたらしたのです。

そこで中央博物館に期待したいことがあります。それはボランティアや友の会等と協力して事業を展開した際には、その当事者達自身による何らかの評価活動を実施して欲しいということです。博物館と利用者の中に位置するボランティアや友の会は、博物館の職員とは異なる視点をきつと持っています。博物館の友人達による評価活動は、千葉県博物館が求められている“開かれた博物館”に近づくための一つの鍵とも成り得るのではないのでしょうか。

水展とボランティア・スタッフのことなど

高野 史郎

1. 開催までのかわり

小川かほる先生から水展の計画を聞いたのは、環境教育演習での“三番瀬”が、まとめ作業に入った2004年の春頃だったか？それから実にあわただしいスケジュールが次々と回り始めていった。

博物館内で水を流すわけにはいかないけれど、水を体験しながら感じ取ってほしい。水の物理的性質とか、水質汚染を調べるパックテストなどは、子どもたちの学習テーマになっている。しかし、太陽系をめぐる唯一の水の惑星 地球をめぐる水の働き、自分のからだの中で循環する水についても、つなげて考えたことは殆どなかったのではないかな？

それまでにいくつかの県下の小学校などで、プロジェクトWETなどからのゲーム展開も含めて、水とのかかわりについて子どもたちの体験調査や学び学習が始められていた。予定されているいくつかの実験装置の実演をするためにも、毎日何人かの解説役が必要になる。その人材を確保するための予算はない。どうしよう。

2004年10月に、水展ボランティア募集のチラシが作られた。そこには、年齢制限：高校生以上、報酬：無報酬、と書かれている。募集人員は50名。子どもたちの学びを支援する事が楽しいと思える人が応募条件とされたが、果たして何人が参加し、研修を受け、夏の2か月間の最後まで付き合

ってくれるのだろうか？

それ以来、“授業料ナシで、ちゃんとした博物館で、企画の段階から参加できて、その効果を自分で確かめられるチャンスなんてむやみにあるもんじゃないよ”などと、人と逢うたんびに言っていることになってしまった。

7~8月の“水展”2か月間の成果は、予想以上だったとっていいのではないだろうか。今回の企画展は、博物館始まって以来のことがいくつもあったと思う。

完成された標本箱ではなく、子どもを対象に据え、体験して感じて考えることを基本方針とした。春には、モップアップといわれる手づくりの模型も含めての事前展示で、来館者の関心・行動調査を行なった。延べ70人ほどのボランティアが、1月の企画展の趣旨説明会を聞き、毎月の研修、そして6月末の4日間の直前研修に参加した。緊急時対応・安全管理などの研修は、初めて体験した人も多かったことだろう。

参加したボランティアにとっては、異世代・異職業、実に多様な人たちとの交流が貴重な体験ともなった。高校生から大学生、若い人たちの解説方法への提案、明るい表情での参加も素晴らしかった。“うちではポケ〜ツとしてお姉ちゃんが、大人にまじってちゃんと話をしているなんて、信じられない”という弟さんの感想もあったという。

市民グループの小さな行動計画のマニュアルも、博物館展示も、試行錯誤を重ねて作り上げていくまでの苦労は、並大抵のことではない。しかし、でき上がって安心した時から、風通しが悪くなって酸素不足になり、嫌気発酵を始めるのが残念ながらハコモノの宿命である。

少し前までの市民グループのリーダーは、その分野の専門家的な人が代表となることが多かった。このパターンは、賛同者によって深められるが、サブリーダーが育たない、外側とつながらない、というマイナス面も併せ持っている。深めていくことと、広げていくことは、DNAが違うのかも知れない。博物館のそれぞれの分野でユニークな企画展が持たれ、市民の視点、子どもたちの関心、学校や企業とのコラボレーションが実現されるとうれしい。

今回の水展の、楽しかった博物館での成果を共有し、これから先にどう進化させ、次の展開に結びつけていくかが期待される。

こうした試みが博物館のいろんな分野で、頻繁に計画されるようになると、近寄りがたいと思っていた一般市民の視線も変わってくることだろう。深刻な顔をしている人の方が、楽しい人よりレベルが高いわけではないのだから。

2. 自分なりの評価と感想

(1) 博物館の役割と市民との関係

博物館職員にとって、展示はそれぞれの長年にわたる研究成果であり、今もそれぞれの研究テーマが継続されている。

市民にとっては未知の世界の発見に、静かに共感する立場になるが、解説する・受け止める、という上から下への一方通行となりやすく、それ以上の関係は期待され難い傾向が見られる。今回の水展は、それを破るものであった。生物の分布や進化には、収斂と拡散とがあるという。深めていくことと共に、博物館と縁がなかった人たちへ広げることへの努力が継続されていくことが望まれる。

遷移の方向も、最終的にはクライマックスで永遠に安定するのではなく、攪乱によって部分的にたえず若返るのだという。最初に失敗した人はえらい、という考えがある。生物の進化は試行錯誤の連続だったという考えもあるらしい。

(2) 水展ボランティア

こんなに大勢の多様なボランティアが博物館展示にかかわったのは、画期的なことであったように思われる。参加したボランティアの多様な視点が、水を巡るものの見方・解説に相互に影響を与えて、2か月間にそれぞれが飛躍的な進歩を遂げた。この普及効果がどう周辺に影響を及ぼすかが楽しみ。これで終りではなく、この次に期待している市民もボランティアも大勢現れた。

(3) 子どもたちのかかわり

前の年に学び学習した子どもたちも、大勢が見に来てくれた。“しずくちゃん物語り”は秀逸！ネイチャゲームの原語は、Sharing nature with children だった。“さわってはいけません、静かにお勉強なさい”から、博物館を再認識した親子も多かったことだろう。水展で子どもたちを体感したボランティアで、生態園ボランティアにつながった人たちも出てきた。

(4) プロジェクト WET

地球を巡る水について、プロジェクト WET のプログラムからのゲーム展開は、事前に、そして期間中に 1 階ホールで、関連して幕張でのエコメッセちば 2005 でも行われた。雨が降る～地下水へ、蒸発する～雲～また雨、川から海へ、植物や動物のいのち。直線的な食物連鎖ではなくて実際には生物相互の食物網という複雑な関連が、水の場合にも当てはまる。この体験が前提にあると、会場のテーマ別展示も理解しやすかったと思われる。会場では、時計回りに一方通行の流れとなった。

(5) 日々進化した展示

水展ボランティアは日によってメンバーが変わったが、開館前と終了後のミーティングでお客様の反応などが共有された。それが展示の追加説明となり、解説にもすぐに取り入れられた。リピーターのお客様が多かったのも嬉しいことだった。この次はもっとうまくできる、もっと大勢のお客様が来てほしい、とさっそく充電を始めた人も多いことだろう。この水展が、中央博物館にとっての、ボランティア元年となった。

「水展」ボランティア参加へのいきさつ

田淵 克彦

1 年前に還暦を迎えた小生が、30 余年間の会社勤めの後に地球環境保全活動へのボランティア参加を思い立ち、そんな考えの一環でこの度の水展ボランティアへ志願させて頂いた次第です。これに先立ち、自身では、次代を担う子どもたちの環境意識の高揚を第一優先課題ととらえて「子どもと共に環境学習」への取り組みを計画し、実施の準備を進めておりました。そのような折から、主催者の中央博物館・環境教育科長の小川さんから水展ボランティアへのお誘いを頂き、「子どもと共に環境学習」の格好の事例と捉えて参加させて頂きました。

来場の子どもたち（おとなも）が、地球上の命の営みに欠かすことのできない水のおいたちと、はたらきを学び、地球をめぐる水の不思議に触れながら思いをめぐらす場。手作りのぬくもりが伝わってくる体験型の展示コーナーで自らの体験を通して水の大切さへの気づきやボランティアとのふれあい・対話の中で環境との関わりに眼を向けた体験など。

ボランティアの一人として、その場での子どもたちの輝くまなざしと歓声が、水展の意義を明瞭に語ってくれたと確信しております。そして、子どもたちの参加・体験が明日の地球環境保全への自らの一歩につながることを願って止みません。

合わせて、私自身の今後へのステップアップへつながる「進化する日々(とまどいながらの日々の反省を踏まえて自らに向けた言葉です。)」の貴重な実践の体験を賜りました。

最後に、この度の 2 ヶ月間にわたる水展の開催・運営を表に裏に支えて下さった小川さんをはじめ博物館のご関係各位、ボランティア仲間の方々に敬意を表し厚くお礼申し上げます。そして、ご来場下さった皆様に心より感謝申し上げます。

水展ボランティア活動に参加して

榎村 光雄

水展開催中 6 回程ボランティアとして活動に参加しました。日頃、子どもたちに接する機会がほ

とんど無いことから、毎回少なからず緊張し、成果も期待しました。この中で感じたことをいくつか記述します。

展示物は多くの分野に係わっていますが、全てに興味がある訳でも十分理解している訳でもありません。又、ボランティアの任務は「案内」「手伝い」という「水展の下支え」の認識でしたが、実態は積極的に説明・解説が求められ、その仕事の内容が運営にも反映されました。ということは、ボランティアは水展の意義を納得し、展示物に対しても十分理解していなければ、責任ある対応ができないと言うことです。

例えば、以下の展示は私自身大変興味を引きましたが若干の疑問が残りました。「水の色」水道水を使ったとのことであるが、純水ではどうか。「水滴」眼前にあるのは落下する水滴ではなく、空中に留まっている水滴ではないか。「ダイヤモンドダスト」オーッとどよめき起きるほど感動的であったが、生成過程が良く解らない。「水滴」の場合も含めて、高速度カメラ等で解明できるのではないか。

各展示物について企画段階から位置付け・方法・内容を議論し、修正・改良を加えることができれば、一層面白い展示ができたのではないかと思います（「プレ展示」を実施し、評価することによりある程度の修正・改良は可能でしたが、まだまだ不徹底であったと思います）。

水展会場はにぎやかでした。子どもたちは生き生きとして、展示物を見、触り、説明を聞き、質問をしていました。ボランティアの人たちも嬉しそうに案内や説明をし、準備や後片付けを自主的にしていました。

一方、常設展示室はいつも人が少なく静かでした。何故か。今回の水展で子どもたちやボランティアが感じた感動が乏しいのではないかと思います。水展を作り上げて行く中で最初に着眼したことは、興味あること、不思議なこと、面白そうなことを取り上げることだったと思います。その着想は展示物は勿論のこと展示方法や運営にまで及んだことと思います。

博物館は研究の成果のみを展示・解説するのではなく、研究の動機、研究過程における思わぬ発見、或は失敗など、そのドキドキワクワクした博物事象を展示・解説して欲しい。きっと県民もその感動を共有したいと思っているに違いないからです。

かかわりからはじまる水への気づき

庭野 裕

2005年夏休みの企画展示室は、中央博らしからぬ雰囲気にも包まれていました。たくさんの展示物をさわったり、自分も中に入ったりと、次々と動き回って体験する子どもたちの姿があったのです。体験型の展示は数え切れないくらい館内に散りばめられていて、ちょっと風変わりな、でも画期的な、とっても楽しい企画展は、どうやら少し今までの展示の枠からはみ出しているようでした。展示室には、展示解説ボランティアの姿がありました。その使命は来館された方々と会話をしながら、水にまつわるたくさんの不思議を伝えるだけでなく、共に発見し、共に楽しむことでした。ですから、ボランティアも展示の一つと思って良いのかもしれない。

この展示のポイントは、必ず来館者の方と展示解説ボランティアのかかわりがあるところです。ボランティアとのかかわりから展示とのかかわりが生まれ、そこから水に関する興味や関心が湧いてくるのです。たとえば、南極の氷コーナーなら「触ってみませんか？」の声かけがきっかけとなって、数十万年前に南極に降った水との触れあいがはじまり、少し溶かすと音まで聞くことができ、ダイヤモンドダストのコーナーでは、実演でその美しさに見とれながらも、水の状態変化を目の前で見ることができます。地下水のコーナーなら「水になって探検してみよう！」がきっかけとなって、いつの間にか水の循環まで疑似体験できてしまうのです。ただ置いてあるだけではわかりにくいですし、展示物どうしをなかなか結びつけられないのですが、そそのかさながら展示をめぐる時、当たり前すぎて意識していなかった水が、急に身近になっていきます。すると自分と水とのかかわりを考えるようになり、食べ物と水の関係や、暮らしの中で使う水についての展示では、実生

活を思い浮かべて考えることができるようになります。そして、家に帰ったあとでお風呂に入ったり、歯磨きをしたときなどに、水のことを気にかけるようになり、そこから水を大切に思う気持ちが生まれます。こうして、ボランティアとのかかわりが、いつの間にか水環境教育になっていたのです。大切なのは、教育だと感じさせずに楽しみながら、来館された方から思いを引き出すことなのです。この企画展は、一見するとたいしたことのない展示物が並んでいたかもしれませんが、身近な水とのかかわりがたくさん紹介されていました。

水について気づく、その第一歩となる企画展でしたが、実は一番おトクだったのはボランティアだったと感じます。たくさんの来館者の方とかかわることができて、その思いを共有できたのですから。

水展ボランティアを体験して

榎井 完治

「ワクワクたいけん 2005 旅する地球の水」という千葉県立中央博物館の企画展でボランティアを募集していると聞き、日頃はビジネスで、都市の喧騒の中で過ごしている私は、都合のつく範囲で「水展」に協力したいと参加申し込みました。

「体験型展示って?」「ボランティアが担うこととは?」2月のプレ展示が始まると、「体験型展示」の内容が具体的になりました。雲、川、海、雨など、日常にありふれた存在である水の、物質としてのユニークな特徴について、水に触れ、コースを歩き、楽しみながら子どもたちに水の不思議を理解させるものでした。

7月2日(土曜日)水展初日になりました。張り切って展示の準備に取り掛かりました。いよいよ開始時間。懸念していましたが、入場者は徐々に増えて、ほっと安堵しました。

「ダイヤモンドダスト」や「地下水迷路」「コインの上の水滴」などの展示コーナーは大好評でした。子どもたちはそう広くない展示コーナーを駆け回って、興味津々です。最初は遠慮していたのに、一気に質問が飛び交い始めました。「普段気づかなかった水について考えられて、楽しかった」「水についてさらに興味を持つ事ができ、参考になった」「地下水についてよくわかり、地下水のしくみや上総堀りのことなども分かった」等々の感想を聞き、子どもたちの笑顔にも癒され、「担当して良かった!」と思いました。

8月の下旬、年配の方が牛丼を上に置いたペットボトルの山の展示の前で「こんなに多くの水が使われているんですか」と聞かれました。「バーチャルウォーターというのですが、輸入している牛肉などを計算すると、多量の水を海外に頼っているんです。」私の説明に頷いて聞いて頂き、良い会話ができました。

今回の企画は、子どもたちを対象にした企画で成功しましたが、今後も継続して水に関心を持ち続けるよう、一般展示などを続けることが必要だと思います。また、さらに大人も対象にした水の展示を、ボランティアと討議しあう体験型の企画を望みます。

プレ展示や資料検討の過程で、多くの事を教えて頂きました。何冊もの水や環境関係の図書を読むことができました。

最後に、千葉県立中央博物館の方々やボランティア仲間、入場された皆様に感謝しています。有難うございました。

水を得た魚

榎井 幸子

「新企画です。手伝ってもらえますか？」小川先生からの年賀状に、好奇心をくすぐられた。正月だというのに、私は何かに追いかけられるように童話を書いていた。自然からのメッセージを子どもたちに伝えたいと推敲を重ね、悶々としていた。

三番瀬を題材にした環境教育演習の際、メンバーの方々からもアドバイスもらった。「恩返しができる。知識の習得も兼ねられる。一石二鳥だ！」もしかして作品のヒントに出会えるかも……そうすれば二鳥どころか三鳥も夢ではない。

説明会、接客研修、講習会と続くうちにハタと気がついた。生徒なら知識を詰め込むプログラムに甘んじていられる。でも立場は逆転した。来場者は博物館というスタンスに惹かれて足を運んで来る。その期待を裏切ってはいけない。にこやかに笑みを浮かべる練習もやってみた。が、デスクワークの経験しかない私にとって、不特定多数の来館者の対応は、週に一度とはいえかなりの緊張を強いられそうだ。どうか来場者が多くありませんように……初日は不謹慎にも天に祈っていた。

「研究員に助けてもらい、来場者と共に学んでいこう」スタッフのミーティングが繰り返される。日を重ねるうちにリラックスできるようになっていった。

大人になっても好奇心を持ち続け、思いを行動に移す熱意を絶やさなければ、直面する環境問題をいい方向に動かせる。知識はそのためにこそある。そう意気込んで解説をするものの、「難しいね」と子どもと相槌を打っている親子に愕然とした。下手？ どうすれば？ スタッフに相談しては知恵を借りた。入館者の視線はどのコーナーに向かうのだろう？ 立ち止まって見ている展示物のエピソードを語りかける。子どもの目が生き生きと輝いてきた。と思ったら、なんと素通りしていた展示物までUターンしてくれた。イマジネーションを引き出せますように、と願いながら解説する。

「分かった！」その一言で、立ち通しで足が攣っていた辛さも吹き飛んだ。

作品のでき栄えに直には繋がらなかった。でも、水をモチーフにしたストーリーが浮かんできた。「どうぞ期待！」プレッシャーを自らに課し、今、私はパソコンに向かっていく。

次は野外で水展を

松尾 弘道

今まで川や海など水に関連した仕事に長くかかわってきたので、まず「水展」ということばの響きに興味がわきました。

自分としては日常の仕事の中から自然に理解してきた「水」、だけどまだ知らない部分もいっぱいあるかもしれない。知っていることは次代をになう子どもたちに伝えたい、知らないことはともに学んでゆきたい、そんな気持ちで「水展」ボランティアに参加しました。

参加してみて気づいたこと

「解説員」と「会場整備員」と役柄を演じわけるのが至って難しい。入館者の自発的な学習意欲をそがない範囲で、どこまで説明したものが迷ったものです。小、中、高校生、はたまた生涯学習校生と入館者の年齢によってもずいぶん違うし、子どもたちだけで来ている場合と親子で来ている場合とでも異なってくるので、なんとなくスムーズに対応できたなど自信がつく頃には、もう水展の終了間近となっていた、そんな具合でした。

入館者、特に子どもたちにとっては手足、体を使うコーナーが人気でした。ゴム風船を地中の土に見立てた水滴（子どもたち）の地中探検（地下水迷路）は予想通りリピーター続出で、「会場整備員」は館が壊れないよう、子どもが地中で「圧死」しないよう「監視」するので精一杯。ついで、水の斜面浸透模型（地下水学習キット）では、水の挙動をじっと観察するのがじれったいの

か、電動霧吹きで斜面崩壊実験に変容、この破壊のエネルギーは男の子、女の子の差感じられず。意外に思えたのが、スポイドで硬貨の上に水滴を何粒落とせるか、の表面張力テスト。これには高校生のお姉さんも果敢にチャレンジしていました。(テーブル脇に腰掛けてしばしの休憩がとれるからなのか)

以上の体験コーナーに比べて観賞コーナーは、ショー的要素の強い「雨粒の空中浮遊」や「ダイヤモンドダスト」(その都度どよめきが起きるほどの盛況ぶり)を除けば、いたって静かな空間でした。高校生以上の年齢層の観賞にも応えられる内容にすれば年少者には難しすぎるかもしれません。幅広い層の入館者を得るにはなかなか難しい課題だと感じました。

総じて、今回の水展は、身の回りに転がっている素材を扱った手作りの「街角博物館」の世界でした。一昔前、物も豊かでなかった頃の子どもたちが近所のおじちゃんおばちゃん、お兄さんお姉さんに教わりながらいたずらしつつ学んだあの体験を再現できたのではないかと感じました。そしてそのお手伝いを当時のおじちゃんに代わってできたのをうれしく思っています。

今後の希望としては、野外での水展ができればいいな、ということです。ほとぼしる水、スケールの大きい砂遊びなどダイナミックな水体験ができるような企画をやれたらまたボランティアに参加してみたいです。

自然観察と水展

千葉県自然観察指導員 盛一 昭代

日頃、自然観察指導員として、ボランティアで生涯学習を支援している私たちは、なぜ? どうして? と疑問が生じるたびに博物館に駆け込んでいる。専門の学芸員に相談し、資料などを整えて子どもたちにはわかりやすく親しみをこめて対応するよう努めている。指導上の研修も積み重ねているが、いつまでたっても試行錯誤という状態である。

こんな時、博物館で体験型展示をとともに作り上げていくボランティアを募集していると聞き、グループで応募した。テーマがあらゆる自然の根源となる“水”ということで、興味が湧いてくる。アイデアから完成まで、構想はできているのに、見直し・改善の検討にボランティアの意思が反映される。博物館の固定観念を破る大胆な発想が求められるのだろうか。

5回のボランティア研修には、若い高校生や大学生の参加も目だった。特に入場者に対する解説のシナリオは、彼らによりユニークなものが創出された。

さて開場となると、手を触れてはいけない従来の展示と異なり、入場者に戸惑いが感じられる。さわって、試して、自主的に学習するよう導くには、もっと綿密な事前講習が必要だった。適切な助言が展示物を活かして、参加者に興味を持たせるのだから。

近所からやってくる子ども同士は、お気に入りの場所で心ゆくまで遊んでいる。しかし、引率された児童の集団は、短時間のうちに嵐のように過ぎ去っていく。ボランティアは装置のメンテナンスに追われ、1日の仕事はきつかった。自信を失って脱落したり、安易な場所に張り付いた人もいたようだ。

目玉のダイヤモンドダストは、1時間おきに1日7回のショーをするのだが、午前中は成功したのに、午後はキラメキが現れず、あわてたこともあった。

接客の練習や危機管理、広報、有料入場者の確保まで広範囲の仕事がある。今まで学芸員は、専門の分野のみに精通しているのだと思っていた。しかし、イベントや展示では、プロジェクトを組んで多岐にわたる仕事を遂行している。予算不足などが彼らの能力を減退させることのないよう、ボランティアが助けることも必要なだろう。無償なのだから気楽なものと構えていたら、夢の実現は遠くなってしまふ。

今回の連帯的な活動が実を結んで、評価が得られたことは嬉しい。われわれボランティア団体の活動にも大いに参考になったことを感謝している。

水展応募のきっかけと参加した感想

山澤 明子

水展応募当時、私は大学院で海水域におけるプランクトンの生態を研究していた。高校生程度の生徒を対象に“環境”に関する講義を、と春からの職場で提案されていたこともあり、“環境”という、身近で、つい通り過ぎがちなものをどのように伝えていくかを考えていた時期でもあった。地球上の物質循環や自然界の仕組みに関する知識を欠いている生徒たちに、どんな材料を選んでいくか。できるだけ生活に密着しているものを取り上げたい、私自身が海洋をフィールドとしてきたので、できれば水に関する環境を取り上げたいと思っていた。水展は、“水”に焦点を当てていたこともあったが、とにかく私自身が生徒たちに“環境”を伝えていくために、このボランティアで子どもたちと一緒に、子どもたちの視線で、私たちを取り巻く水環境について学んでみたいと思ったのが、応募の一番の理由であった。

実際にボランティアとしてやってみると、うまくいかないこと、自分の力が不足していることが多々あった。地下水迷路は、気をつけないと、ただのおもちゃになってしまうし、地下水流動模型は、目を離れた際に、土砂崩れを起こしていたこともある。土砂崩れにならなくとも、本来得たいと思っている気づきを、上手に導けないこともある。蒸発熱実験は、低学年の子どもにもわかりやすく伝える言葉を見つけられないままに終わってしまった。雨粒の形やダイヤモンドダストに関しても、おもしろい、きれいと感じた、その先の気づきを果たして導くことができたのか、自問自答していた。

そんなときに、ああ、そんな感じ方もあったのかと、私の中の“水”という世界を変えてくれたのは、紛れもなく水展に来てくれた子どもたちだった。子どもたちの小さなひと言、ひと言が、私の“水”という世界を広げてくれた。“子どもたちに、こんなことを感じてほしい、わかってほしい”という思惑を超えたところにある子どもたちの視線、思考こそが、そういえば、今回私が一番ほしいと思っていたものではなかったか、と初心に戻ることができた。その中で、ボランティアとしての私の仕事は、子どもたちが体験型展示を通して“水”という世界を歩くための、道づくりではないか。そして、その先は、一人ひとりの子どもにゆだね、子どもが感じたことを尊重し、素直に受け入れていけばいいのではないか。

ボランティア同士の情報交換も、道づくりの貴重な道具となった。ボランティアも十人十色の感じ方で、水の世界に挑んでいることが、大きな励ましになった。いいものは取り入れ、問題はみんなと相談して解決した。職員の方々と、来場者と、ボランティアとで作られたこの展示は、私にとって環境を伝えるという、具体的な実践の場としてだけでなく、人との関わり方や教育というものを考える、大きな機会を与えてくれるものであった。